

## 巻 頭 言

3年間世界中で猛威を振るったCOVID-19エピソードも、2023年（令和5年）になって、ようやく一区切りがついたようです。日本でもエピソード前の日常が徐々に戻り、マスクを外した笑い顔があちこちで見られるようになりました。しかし忘れてはいけないのは、未知のウイルス・細菌感染症はこれからも定期的に発生し続けるということです。いかに科学・技術が発展しようとも、人間が地球の生態系の一部であり（感染症を引き起こすウイルスも生態系の一部です）、我々が自然環境の下で他の生物や環境と折り合いをつけて生きていこうとする限り、完全にこのリスクを排除できません。地震や台風などの自然災害とも共生していかなければならない事実と同じです。もちろん、完全に管理された、人工的な環境で生涯生きていく選択を我々がすれば別ですが、そこに幸せはあるのでしょうか。

オープンAI社が昨年発表した「ChatGPT」をはじめとする生成系AIが急激に社会に普及しつつあります。AIの学習能力は驚異的で、おそらく今年度（2023年度）中にはかなりのものになるでしょう。いわゆるデータ検索に加えて解析からの創造や行動判断も行うこのAIの進歩は、たとえば高齢化する過疎地の社会インフラを補完したり、ヒューマンエラーから生じる事故を防止したりするでしょう。一方で、オンライン上にあがる偽の情報（いわゆるフェイクニュース）の弊害も一段と問題になるかもしれません。人間社会における生成系AIの危険性は多岐にわたり、我々の社会を減ぼしてしまうかもしれないという危機意識を今世界中で共有することになりそうではありますが、現代社会に生成系AIが実装される流れは止まらないでしょう。大学教育も従来のカリキュラムや授業内容を大幅に変更する時期であると、私自身は確信しています。それが今の現役世代にはかなり不快であったとしても、です。

そこでふと「人間の在り方」を考えました。多くの他の生き物とは異なり、人間は進化の中で「頭の中で世界をイメージ（概念化）する能力」、すなわち知能を得ました。この能力を持って以来、人間は「万物の霊長」としてこの世界に君臨することになりました。しかし一方で、人間の身体は他生物と共通する生物的特性を多く残しています。後者を「リアル」な世界とすれば、前者は「バーチャル」な世界です。ようやく新聞や書籍による「バーチャルな情報（世界）」のみが利用できた100年前とは異なり、現代社会はさまざまなメディアによるバーチャルな情報があふれています。その一方で、100年前は我々の生活において重要な判断基準（間違いも多かったのですが）であった、対面での情報交換の価値が相対的に減っているようです。これまでの講義・座学中心の教育は、教師への信頼に依拠した真実に近い情報伝達ではあったものの、若い人たちのバーチャルな情報への依存を不必要に高めていったのかもしれない。我々はもう一度、この辺から自分（たち）のふるまいと世界の見方を考え直さなければならぬのかもしれない。

公立鳥取環境大学の地域イノベーション研究センターでは2019年より、「化学成分分析データを用いた鳥取県産農林水産物のブランド化」に取り組んできました。リアルな生物である我々が日々口にする食材の化学成分は「リアル」な事実であるのに対し、「美味しさ」や「安全性」、「健康に良い」などの情報は、「バーチャル」な情報を多く含みます。同時に、普通の生活では体感することのできない化学データは、リアルな事実でありながら多くの人からは敬遠されがちな情報でもあります。しかし、バーチャルな評価の中にリアルなデータをいかに蓄積するか、その努力を惜しまないかが、今後地域の優良な産物を世の中に認めてもらうには必須であると考えています。2022年度も4名の本学の教員が、最先端のリアルな事実を用いて、鳥取県の農林水産物のブランド価値を高めるべく研究を行いましたので、報告させていただきます。

令和5年6月

地域イノベーション研究センター長 吉永 郁生